別紙　2

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　呉暁林

Ⅰ．本論文は、三線建設の政策過程分析を基軸とし、新しい資料を可能なかぎり渉猟し、独創的な論点を展開することによって、三線建設がたんに「非効率で、不合理な軍事建設戦略」ではなく、文革期毛沢東の後期経済発展戦略の具体的形態であることを明らかにした。本論文の学術的貢献として評価しうるのは、以下の諸点である。

1．本論文の最も独創的な点は、毛沢東が三線建設を遂行する際に、既存の国家計画委員会を外して、「小計画委員会」を作ったことの意味を的確にとらえ、「石油派―余秋里石油工業部長―大慶油田開発方式」の関連を読み解き、大躍進政策と三線建設の関係を、いわば「正規の軌道」に乗せることができたということにある。このことによって、三線建設はたんなる三線地域の国防建設ではなく、大躍進政策の失敗と成功をふまえた、毛沢東の発展戦略の新たな展開と見ることが可能になったのである。大躍進の失敗後、都市ないし工業の調整は、再び中央集権化され、たんに旧体制に戻されたにすぎなかった。つまり、大躍進失敗後の工業面での再編は未だできていなかったのである。そこに三線建設登場の意味がある。

2．この論理の発見と関連して、大慶油田大会戦方式を基礎として、三線建設の具体的な建設方式を提示している点も、三線建設が基本発展戦略であったことを裏付ける上で、きわめて説得的である。

3．三線建設の一つの歴史的源流として、国民政府資源委員会の大後方における重工業や資源探査の遺産を位置づけたのは、たいへんユニークな発想である。これまで両者の関係を指摘した研究は皆無といってよい。確かに、毛沢東が三線建設を発想してから実行に移されるまで、きわめて短時間であったのに、大規模、大量の建設に着手できたのは、それ以前の資源委員会の遺産があったからという説明は、それなりに説得力がある。

4．1970年前後に目立ってくる「五小工業」について、「小三線建設」との関連でその形成過程に新しい光をあてていることも、十分に評価に値する。「五小工業」は、農業機械、小型鉄鋼、小型水力発電、小型セメント、小型炭坑を意味するが、いずれも小型重工業といわれるものであり、毛沢東発展戦略で重要な位置を占めるものである。

5．本論文は、全体として、これまでの先行研究を大きく超える水準を達成

している。これまでの研究が、多く二次資料に基づいた研究であるのに対して、本論文は、一次資料と関係者の回想録に依拠し、現在入手可能な限りの資料に基づいた、三線建設に関して最も包括的な研究であると評価することができる。

Ⅱ．　本論文の問題点をあげれば、次のとおりである。

1．　「三線建設の歴史的源流」として、国民政府資源委員会、延安モデル、東北モデル、第１次５ヶ年計画の５つが取り上げられている。資源委員会に最も多くのスペースがさかれているが、概して並列的である。三線建設との関係では、自ずから精粗があるはずである。もう少し立体的な論理構造にすべきであろう。

2．　本論文は、三線建設が文革期の発展戦略の主流であることを主張するあまり、三線地域以外の地域（沿海、二線、辺境）と三線建設との関係についてほとんど言及がない。これは、一面で説得力を欠くきらいを残すことになった。

3．　三線地域内の地方としては貴州省の例がとくに取り上げられているが、必然性は希薄である。最も重要な地方は四川省であることは論を待たない。

4．　政治過程の分析が分かりにくい。むしろ時系列で叙述したほうがよかったのではないか。

5．　テクスト・クリティークを必要とする箇所が若干ある。

6．　誤字、脱字が散見される。

Ⅲ．このように若干の問題点はあるが、いずれもその瑕疵の程度は軽微である。本論文は、きわめて独創的な論点を展開しており、先行研究を超える水準にある。

以上の理由により、審査委員会は全員一致して、本論文が博士（学術）を授与するのにふさわしいものであると判断した。